

あ～レイプしたい！
一度でいいからレイプをしてみたい！
でも、逮捕されるのが怖いからやれないですよ。ねえ。
そんな悶々とした日々を過ごしている僕ですが、ふと思ったわけですよ。
「自殺希望者ならレイプしちやっても大丈夫じゃない？」
と。
だって、ほら、どうせこれから死のうとしている人なら、何されても問題視されないと思いませんか？
そもそもそのくらい嫌な経験をしてきて死んでしまおうとの覚悟をしているような人だし、レイプされなくてもどうせ死んでしまうわけでしょ？
このまま我慢し続けて、僕がいつかレイプしてしまうかもしれない他の女性の身代わりみたいになれて、社会貢献にもなってみんな幸せ！

うん、僕の計画はどうよ？僕の思考を覗き見しているそこの貴方！
「なんだこいつ！狂ってるんじゃないの？正直不快で、ムカツくんですけど」
とか思っちゃいます？
それは嘘ですね！
僕の思考を覗き見している時点で貴方も少なからず僕と同じような思考の持ち主のハズです。
実行したことはなくても、僕と同じようなシチュエーションでオナニーした経験があるハズです。
同じ仲間じゃないですか。
それなら、これからこの計画を実行に移そうとしている僕のことを不快に思って拒絶するよりも、どうなるかの先行きを一緒に見て行きませんか？

あ、でも僕が成功したからって貴方も成功するとは限らないから、真似しないことをオススメしますよ。
そもそも僕の住む世界と貴方の住む世界とでは法律とかも違うかもしれないからね！
それはともかく、自殺したいと考えている女をレイプするには、まずその女を探すところから始めないといけないよね。
さてどうしたモノか？
色々考えたんだけど、2通り手段があるかな？
一つ目は、**SNS**で自殺願望を抱いている女を探して交流を持って、実行時期や場所を聞き出して現場に先回りしてレイプする。
二つ目は、知り合いの中でメンヘラ気質な女と仲良くなって色々情報を聞き出しつつ、自傷行為を確認したタイミングでちょっと追い込むような態度をして、現場に先回りしてレイプ。

僕の場合は幸運にも職場の女に一人メンヘラ気質で、恐らく自傷行為をしているであろう女が一人いるので、後者を選択することにした。（彼女の雰囲気もそうだし、いつも夏場でも長袖を着ており、腕まくりすらしないので傷を隠しているのかと思われる！）
そのような女が身近にいないければ**SNS**で探しまくったと思うから、手間が省けて僕的にはちょうど良い。
ともあれ、僕の計画は順調に進んで、その職場の女を上手く追い込むことができた。
その方法は企業秘密で内緒だよ！

「今までありがとうございました。私は今日の夜9時に人生に幕を閉じたいと思います。」
と**SNS**に投稿しているのを確認。
個別に連絡を取り
「止めないから、最期を見守らせて欲しい」
と上手いことを言って場所も把握し、待ち合わせるようになった。

僕は夜の9時10分前に待ち合わせ場所の公園駐車場に到着。
「まだか？まだか？まだ来ないか？」
と車の中から公園の入り口の方を何度も、何度も確認し続ける。
これから知り合いをレイプすると思うだけで、期待と緊張で心臓が破裂しそうな状態だ。
（まだ来ない、まだ来ない。）
実質的には5分くらいの時間だったと思うけれど、僕の中では何時間も待ったかのような感覚だった。
すると、公園入口の方から人影が僕の車の方へ歩いてくるのが見えた。
（来たあ～！！！！）
僕のドキドキは最高潮に跳ね上がるが、建前は最期の時を見守るなので、深呼吸をして興奮が表情に出ないように気持ちを落ち着かせる。

コンコン。ガチャ
助手席のガラスを彼女が叩き、車の中に入って来た。

彼女は雰囲気かメンヘラだとわかると言った通り、どこか陰のある雰囲気、とても体の線が細いスレンダー体型。

流石に顔が美女と言えるほど都合が良いわけではないが、決してブスと言うわけでもなく、僕的には有りな顔をしている。

「今日はありがとう。最期のときを一人で過ごさなくて済むのはちょっと安心する。」

「そんなこと、こちらこそそんな瞬間に一緒にいさせてくれてありがとう。」

そんな会話を2、3交わした後の沈黙・・・

「じゃあ、そろそろ行こう。この奥の林の中でって考えているんだ。」

そうすると彼女は車から降りて公園の奥の方へと歩き出す。

(いよいよだ、いよいよ人生初のレイプタイム！)

僕はその場の重苦しい雰囲気とは全く違う感情の中、彼女の後を追った。

暗い公園の道を奥へと進む。

彼女は無言のまま黙々と歩き続ける。

その少し後ろを彼女のお尻を見ながら僕が続く。

(この小さいお尻もこれから僕に犯されるんだね。旨そう！)

そんなことを考えていると僕の股間は見る見る内に大きくなっていき、痛くてたまらず、僕はチャックを開けてチンポを外へ開放してやった。

この公園のこの辺りは、夜には他の人は誰もいないし、暗い道なので彼女も気付きはしない。

まあ気付かれたらその場で襲えばいいだけだし、問題はない。

深刻な表情で黙々と歩く女性と、ギンギンに勃起したチンポを露出させてその後を追うレイプ魔。

そんな異様な二人組が公園の林の中へと消えていく。

・・・

「うん、ここでいいや。じゃあこの辺りで終わりにしようと思う。」

公園の道から見えにくい林の中、彼女が僕の方を振り返る。

「うん、わかったよ。じゃあ最期に、君のオマンコに僕のチンポを突っ込んで中出しするね。」

僕が何を言っているのか理解できず混乱している彼女との距離を一気に詰めて、押し倒す。

「えっ？ちょ、ちょっと待って！な、何を言っているの？私の最期を見守ってくれるって。」

「でも君、今から死ぬんでしょ？なら別に良くない？正直君みたいな女性が命を捨てるなんてもったいないよ。でも止められないでしょ？それなら最期くらい僕の願望を叶えさせてよ。一度でいいからレイプを試みたかったんだよ。君をターゲットに定めてからは、職場でもレイプする女としか見れなくなっちゃってて、いつも君の胸とか、おしりとかを見ていたの知ってた？ぐふふ。」

「き、きもっ！あんた、ありえない！マジでキモいんだけどお前が死ぬよ！？」

「ぐふふ、そう言われると思ってたよ。でも気が強い女をレイプ出来ると思うと、逆に興奮しちゃうよね。しかも知り合いと言う点が更にポイント高いよねえ。」

逃げようと暴れる彼女を力づくで裸にしていける。

するとそこにはおっぱいと言うか、絶壁と言うか？

病的に小さいおっぱいと、その先端にピンク色の綺麗なおっぱいが顔を見せた。

「見るな、クソ野郎が！」

彼女からの罵声を無視し、僕は彼女の腕を力づくで押し広げ、彼女の小さな胸に顔をうずめる。